

①学級づくりは担任カラーで

日常的な学級づくりは、学級担任のカラーによる仲間づくりを基本とする。特別なことを導入することは、学級担任の負担につながる可能性がある。

- 「こんな私の話より〇〇先生がここに来て話してくれた方がよっぽどたくさん意見が出る、代わってくれないかなあと思っていた時期があった。他のクラスの先生のやり方が気になってしかたがなかった頃もあった。生徒たちも敏感に感じ取るのか、そんな私が前に立っても、おそろおそろの意見が多かったように思う。もうこのクラスは私がやっていくしかない。と覚悟を決められるようになってから、自分自身もクラスも少しずつ前に進んでいくというか、歯車が回り始めたのではないかと思う。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 60代女性 Y 教員)
- 「先生と私のやり方はまったく違うと思うんやけど、だから先生のしよることはすごく理解できるし、やり方は違うけどどっかで一個になればいいなと思うし。めざすところはみんな一緒な気がするのね、板中のあのときおった先生方って。自分の力量とかによって違うでえ。だって私は〇〇先生にもなれないし、先生にもなれないし、自分のやり方でしかやれんのやけども。でもめざすところは一個だった。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 50代女性 F 教員)
- 「いきなり全体学習をするのではなく、それまでの土台となる学習がきちりできていることにより、より効果があると感じました。みんなが前向きに検討することによって、より効果があると思えるようになり、仕事にも役立っていると思います。」(板野中学校全体学習1～2年目 30代男性 HK)
- 「そもそも全体学習というのが、あの体育館ですることだけを言ってるのか、クラスづくりを含めて言っているのかっていうので、クラスづくりがベースとしてない全体学習は意味がなかったと思う。」(板野中学校全体学習4～6年目 30代女性 AZ)
- 「自分から気づくには自分で自分に問えないかんし、自分の意見も言えないかんし、他人の意見も受け止めれないかん。だからそういう意味では全体学習ってすごい大事だよ。でもそれは最終形態の話よ。そこで勉強するっていうのはね。まずクラス単位でそれができんとできるわけないし、学年でなんてできるわけないやん。」(板野中学校全体学習10～12年目・人権を語り合う中学生交流集会 20代男性 KY)

この取組を進めていくなかで、リーダーシップを発揮する教員が出てくることは望ましいことであるが、「その教員のようにあらねばならない」という観念にとらわれてしまわないことである。素晴らしい実践者から学び、良い面を吸収することで自己の教師力向上につながることは悪いことではないが、それが、自己のカラーの喪失につながることをないように留意しなければならない。良い面は取り入れながらも、あくまでも「自分は自分」という、自分のカラーを見失わないことである。

例えば、複数のクラス担任の専門教科が異なることで、それぞれの教科の特性から人権学習にアプローチすることは、他のクラスの生徒にとっても学びの拡がりが見られる。また、学年団教員のキャリアや趣味、世代の違いは、互いにとっても違った視点で人権について捉えることにつながる。複数のクラスが同じである必要はない。それぞれのカラーの違いを認めつつも、みんなが同じ方向を向いて人権学習に取り組んでいるという姿勢を学年全体で共有し合うことが肝要といえる。教員それぞれがカラーを出し合うことで視点を拡げることが、互いの学びとなっていく。

また、どんなカラーであっても、学級としての取組のないところで「集団で語り合う人権学習」を行っても、うまくはいかない。仮に発言が相次ぎうまくいったとしても、それにもとづいた学級の取組に還元されなければ、より高い次元の学習は望めない。この取組の基本は、学級担任のカラーによる仲間づくりといえる。

②心通う生活記録・生活ノートの往還を

学級づくりのなかで、学級生徒との心が通い合う取り組みは必須である。その手法は様々であり多岐にわたるが、毎日の制約された時間のなかで学級生徒全員と対話することが難しいことを考えると、生活記録・生活ノート

の取り組みは有効であるといえる。生徒によって活字に表すことに得手・不得手はあるが、自分の中にある感情や思い、意見を文字に表すことで客観的に自分を見つめることは、自己の考えを形作っていくうえで欠くことのできないプロセスといえる。日々、生徒から投げかけられた言葉に、教師は様々なイメージを膨らませる。生徒の友人関係、部活動での姿、家庭生活や家族との関わり、これまで育ってきた生い立ちに思いをめぐらし想像する。そして、その時々で最善と思われる言葉を返していく。翌日には、さらに突っ込んだ内面に迫る言葉がつづられていく。このていねいな往還が、生徒との信頼関係を築き、安心して自分が表現できる関係性の土台を築いていくといえる。

■「教師と生徒、生徒同士の信頼関係ができていないところに真の話し合いはあり得ない。そのために日々、自分はこれだけの人間だと言うことを、子どもたちに知ってもらう。生活ノートでの会話、学級通信、休み時間などでの話などで、私自身の思いを伝えていく。そのこと抜きでは全体学習はできないと思っていた。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 60代女性 Y 教員)

■「①教師との信頼関係ができている生徒 担任との生活ノートにも家族のことや自分のことを綴ってくる。苦しいことや悲しいこと、うれしいこと、友達との出会いへの感謝の気持ち、これからの自分を見つめられるような内容のノートを書けたり、表現できるようになったりしてきた。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 40代女性 I 教員)

■「学級通信みたいなものを出してくれて、あれで一回まとめられてた。こんなことあったんだとか。私は結構文字で見るほうだから、それがすごい理解しやすかった。あの時あんなことがあって、こんなふうになったんだみたいなのが。断片的だけど。全体的に覚える感じ。」(板野中学校全体学習4～6年目 30代女性 AZ)

■「ワイが中3のときに吉成とやった交換日記、正直気持ち悪かったけど。吉成は書くことによって文章能力がつくみたいな感じで、その当時ワイに言ったと思うわ。今でも覚えるけど。でも、そうじゃないと思うんよ。確かにそれもあるよ。漢字も覚えるし、文章能力もつくだらうけど、でもホンマの意味は、さっきの全体学習の話ではないけど、表面上はそうかもしれん。でもホンマの意味って、心通わすためって思う。そこが一番重要なやと思う。だから中3のときに、他の先生に言えんことでも、吉成には言えた。なんか。それをやって通わせるとこってというのが、他の先生に対してよりも、ワイは吉成に対しての方がでかかったから。通わせると気持ちの大きさっていうのかな。ってというのがあったから、何でも言えたよ。」(板野中学校全体学習10～12年目・人権を語り合う中学生交流集会 20代男性 KY)

板野中学校の全体学習がどうして可能となったのか、初期の状況を思い浮かべながら私なりに解釈してみると、いくつかの要素が重なり合った結果でないかと思える節がある。それは、かつて羽ノ浦中学校が行っていた学習オリエンテーションの手法を仁木学年主任がもっていたこと。そしてそれを同和問題学習でやってみようという提案があったこと。また、森口教諭からは生活ノートの取組の提案がされ、それらを統合するものとして、仁木学年主任が学年通信の発行をほぼ毎日行っていたことである。それらが組み合わさったのは偶然であるが、今思えば、見事に「集団で語り合う人権学習」の核となる要素が揃った結果といえるように思う。

ただ、必要な要素ではあったものの、十分ではなかった。それがゆえに、誰にでも、どこでもスムーズに実践できるものとはならなかったのではないだろうか。特に生徒は、学年や学校によってまったく違い、それぞれにカラーがある。だから同じようにやることができることもあれば、できないこともある。「こうやっとうまくいったから間違いない」とは思い込まないことである。それでうまくいかないケースを何度も見てきた。必要なことは必要なこととして残しながらも、それ以外の部分においては、学年や学校の状況に合わせてマイナーチェンジさせていくだけの柔軟性を、教師が協働性のなかで試行錯誤しながらもつ必要がある。

とはいえ、生徒のその時々的心情を的確に把握する意味において、生活ノートの取り組みは必要と言わざるを得ない。仮に生活ノートでなくても、心情を把握するような手法を試みていくことである。特に、人権学習を行った日には必ずその感想や思いをつづるように生徒と約束しておくことは有効である。それをきっかけにして、心情や生徒の状況が零れ落ちてくることもある。そのやりとりが、生徒との信頼関係を築く格好の機会となる。

③授業は生徒がつくる(生徒の主体性と教師の主体性)

「集団で語り合う人権学習」に取り組んでいくなかで期待したいこととして、「授業は生徒がつくる」という視点がある。生徒の主体的な語り合いの中から私たちは、それまで見たことのなかった子どもたちの姿を目の当たりにすることができる。それは、表現力であり、人を認めつながる力であり、自分を信じてがんばれる力である。その能力を認知できたとき、教師自身の教科授業が見直されても良い。生徒自身が主体的に授業をつくっていくような授業への改革、つまり、「他律的教育から自律的学習への進展」(『学習原論』木下竹次)となっていくような教師の意識改革につながっていくことを期待したい。

これは、本実践に取り組む教師にとっても同じことである。やらされて取り組むのではなく、自らが主体的に授業づくりに取り組むことである。教師が楽しまないで、生徒が楽しめるわけがない。まず、教師がわくわくするような授業を考えることである。例え課題が出たとしても、その課題を次の授業に向けてのステップにしていけば良い。

- 「「そうやって育った人間関係があれば他の授業も自然と発表が多くなる。今推し進められている言語活動が当時にもう可能になっていた。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 60代女性 Y 教員)
- 「「少なくともたくさんよりは少ない人数の方が、それはやっぱり言いやすいと思うね。だからやっぱり、例えば地区のお父さんやお母さんと話するときと言える本音が、じゃあ研修の場で私たちが同じように言えるかっていうと、やっぱり研修の場だったら言えない部分が出てくるのよね。それはやっぱり、ここだったら言えるっていう安心感、そういうのがあるので、学級でも一步一步かなって思うかな。中1があつて、中2はまだ言えずに中3になってやっと自分の中の自分でいうものができて、考えというものができて。そしてその何人かが言えたときに、また違う絆っていうものができんかなって思うんやけども。それも1年の時から同じものを求めるっていうのも、今の自分が離れてこの歳になってみて、中学生の発達段階を考えたときに、1・2・3同じはちょっと難しいかなって思うけど。」「あの時はできないと思いながらも、とにかくやらなければいけないという感じだったので、本音は言よんやけど、とにかくやらないという選択肢もなかったし。とりあえずやらなければ、第何回目だみたいな感じだったので。だからなんて言うのかな、もっと自然のなかでできる形があるのであれば、きつというんな学校にも広まると思うんだけど、T中に限らず、どっかに無理があれば、やっぱり広まらないと思う。でもN中の子がね、全然人権問題学習深まっていかなかったんだけど、あのようけの中で〇〇先生が来て話したら、ガラって変わるん。何で変わるか分からんやけど、魔術のように変わるわけよ。だからそうやって変わった中でしゃべりたいっていう子が、その子らが核になってしゃべって、オレこんなことがあったんよみたいにししゃべってくれるのは全然いいと思うんやけど。オレしゃべったからお前もししゃべれよみたいになったときは、やっぱりうまいかないかなとは思ふな。でもその、しゃべらなければいけないっていうようながんばり屋さんの子がまずは自分からしゃべらなければいけないみたいになってはいけないと思うのよね、自分を潰すと思うんよね。」「先生のクラスがあつたとしたら先生のクラスでやってみて、自分のめざすところはこんなところなんやけど、まあもし他の先生方もやってみようと思うたらやってみませんかっていう形だったらできると思うんやけど、人間なので強制されるとまずしたくないっていうのがまずあると思う。とりあえずまず一人でもやってみようかなと思うたらいいかなって思う。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 50代女性 F 教員)
- 「「クラスの中では発言が少ない、できない。発言しても表面上の問題解決策を言ってしまう。実現可能かどうかは別として。教員側の望むような落としどころに発言を寄せようとしてくる。そうじゃなくて本音でしゃべりたいんでしょっていうところがあるんだけど、ない。けど中学生集会に来ると、そういう発言が多くなる。これは穿った見方かもしれないけど、人間関係が濃くなればなるほど、言えないことが出てくるのかなと。腹の中の探り合いではないんだけど。こういう言い方をすれば傷つくんじゃないかとか、これは言うよ、その集団で居場所がなくなるんじゃないかとか。」「人間関係のある程度薄いところ、さっき吉成先生の言ったような、まったく関係のない1年生と3年生のような関係の方が、実はしゃべりやすいんじゃないかと。重いテーマに関しては、けど受けとめてくれる。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 50代男性 S 教員、人権を語り合う中学生交流集会 40代男性 H 教員)
- 「「もっと国語のあり方というか、道徳の授業でもっとスピーチとかやっていったら、そこが積み重なって行って、場慣れ?自分が思ったことを人に伝えることの難しさであったり、大事さをまず理解してから全体学習とかしたら、ものすごい意義のある授業になると思うんよね。」「高校でスピーチの授業を受けた先生が一番今まででホンマに上手いと思った。考えさせられるものの言い方するし、スツて自分に取り込めるような伝え方をしようとする

る。だから生徒もそうだけど、先生も、そういうふうな意味では変わっていかないアカンと思うな。先生と生徒と一緒に変わらんと、授業なんて変わるわけがないんだから。だからそこをもっと変えてほしいなって、今思えば。自分は受けているんな経験をしてから思う。まず変わるべきは先生だったり、教育のやり方だったり。」(板野中学校全体学習10～12年目・人権を語り合う中学生交流集会 20代男性 KY)

これまでの多くの授業における形態は一斉学習であり、独りで学ぶ学習が効率がよいとされてきた一面がある。ところがそこには、すべての生徒が学習進度に合わせられているという前提がある。しかし、すべての生徒が常にそういうわけではない。分からないときもあれば、分かっている生徒もいる。分かる者に合わせて授業を進めれば、分からない者はなおいっそう分からなくなる。落ちこぼれではなく、教師が落ちこぼしていくのである。

ところが、「集団で語り合う人権学習」を見ていくなかで、子どもたちの表現力やつながり合う力、学力を超えて学び合う力を目の当たりにすることになる。それは、互いを認め合い自分を信じてがんばれる力、互いを高め合い伸び合う力へとつながっていく。教師がこれまで自分の授業では見られなかった子どもの力を目の当たりにしたとき、自分の授業でもそのような子どもたちの力をうまく活用できないかと考えてもおかしくない。発表の機会をつくったり、意図的にグループ学習を組んだり、教え合い学習を行わせたり。また、プレゼンテーションをさせたりホワイトボードを使って説明をさせたり、様々な手法を取り入れることで、授業は一斉学習から生徒の主体的な学習へと大きく変えられることが期待できるし、子どもたちの学習に対する関心は高まり、それが個々の主体的な学習意欲につながる。そしてその姿は、人権学習における子どもたちの姿としてさらに反映されてくる。

最終的にイメージしておきたい子どもたちの人権に対する姿勢は、「先生に頼らずとも人権に関心をもつことができ、自ら進んで歩み、広く対話できる力」ではないだろうか。中学校での人権学習で気持ちが高まっていた子どもたちが、高校に進学し、見事なぐらい潰れていった姿をたくさん見てきた。高校の姿勢を責める気持ちを強くもっていたこともあったが、それは間違いだった。そもそもすべての中学生が高校に進学するわけではない。ということは、中学校で人権学習は完結させておかねばならないのである。完結とは、「自ら情報を得、考え、周囲と対話を重ねながら判断し、自らの思考を絶えず深めていく姿勢を身につける」ということではないかと思う。つまり、高校に行ったとしても、高校の先生に頼らず、自ら進んで話し合いを進められる力である。生きている限り、人権と向き合わずに生きてはいけない。決して自分の中だけで完結させるのではなく、結論を出すのでもなく、絶えず周囲とコンセンサスを取りながら、自分のなかの内なる自分と対話し続け、人権について絶えず考え続けるという高みにまで押しあげることがイメージし、中学生生活3年計画で人権学習に臨むことと考える。高校に行き、社会に出て、人権について主体的な取組を進めていくイメージを、中学3年間の間ではっきりと体得させておくことである。そしてその主体的な姿勢は、教師についても同様に求められるものといえる。(【実施上の12の留意点】「④発言は自由意志で」も参照)

④道徳と学活の時間確保を

特別な学校行事に消化されない限り、毎週の時間割にある道徳と学活の時間は、確実に保障されなければならない。道徳は、内面を耕す、本学習に直接つながる重要な時間であり、学活は、耕された内面を受けて、主体的に自治力を体現していく重要な時間である。この二つの時間は、主体的な行動を日常的に醸成していくための大切な両輪といえる。

■「毎日毎日学校に通ってきてると、クラスが居心地いいってすごく大事。勉強ができるできないよりも、ここに自分がいてもいいんやなっていう、それだけで学校に行きたいなって思えるし、しんどいときは生きとっていいんじゃぐらいになると思えるから。いろんな人がいて、いろんな価値観があって、いろんな考え方があって、それでいいんやって。そのなかでどうつながっていったらいいんだらうなって思えるのが大事だし。自分のことも大事だし、相手のことも大事だって思える。もちろんぶつかることもあるんだけど、ぶつかることが悪いことではなくて、ぶつかってみんなで、二人だったら二人で、その落としどころ、クラスだったらクラスみんなで」

れが一番いいんだろうなって考えて、落としどころを見つけていくっていうのが一番いいんやなっていうか、一番みんなが納得いくし、気持ちがいいし、みんなで決めたなって思えて、みんなでやっていこうって思えるからと考えられるようになった。」「自分の考えと合わない人とやっていくのって。排除してっていうか、自分の考えと合う人とやっていく方が楽しいし、楽だし、そっちの方がいいなと思うけど。けどそれだけだったら面白くないんだろうなっていうか。自分の考えつかないような考えが出てきたりとか、それぞれでは考えつかないけど、新しいものが生み出せるっていうか、ぶつかることで相手のことがより深く知れる。より自分のことも分かってもらえる。それが楽しいと思えるようになった。」(板野中学校全体学習4～6年目 30代女性 AZ)

「集団で語り合う人権学習」の基盤は、学級での人権学習の取組であると言い切れる。そのもととなるのが、道徳や学活の時間である。しかし、学校現場では、道徳や学活の時間が安易に他の時間に転用されることがある。日課の5校時もしくは6校時に位置づけられ、何かのイベントに使われたり、削られたり、その他のことに転用されたり。他教科であれば、必要時間数や評価の関係で取り返されることがあり、道徳や学活もそうであるならば問題はないが、なかなかそうはなっていない実態を見受ける。しかし、先にも述べたが、「集団で語り合う人権学習」にとって学級での取組は必須であり、欠くことはできないし、そもそもなおざりにされること自体、あり得ない話である。道徳の時間を活用し、人権学習に取り組む。また、学活の時間には、自分たちや自分たちの生活を見つめ、PDCAサイクルの視点で自分たちのクラスの課題解決を実現していく貴重な時間である。育んだ心情や科学的に社会を見つめる眼は、主体的に課題解決していく自治力と結びつき、人権文化の根づいた新しい社会の構築を醸成していく。したがって、道徳と学活の時間を、その本来の趣旨に沿った活用がされないということは、人権文化にもとづいた新しい社会の構築につながっていかないということになる。

⑤様々な視点からの語り

子どもたちに、その時々で起こっている社会問題・人権問題などについて朝夕の学活などで語りかけることである。新聞を持ち込み、その時々で話題となっている人権問題を語るのもいい。社会問題に絡めて子どもたちの日ごろの思考や行動を評価してみるのもいい。これらのことから、子どもたちの視野が広がり、新聞や時事問題、知的好奇心としての読書への関心がめばえるとともに、日ごろの生活のあり様や学習への姿勢を見つめ直すことのできる日常づくりにつながっていけると考える。

- 「思いを募らせて手があがるまで、かなり揺さぶられないと立ち上がる勇気までにはならない。その素地としての「思い」。日頃から人権意識を磨けるようにいろいろなことから発信していかなければならない。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 60代女性 Y 教員)
- 「あれから数年たった今、良かった点は、正しい知識を持っているからこそ周りの間違っただけに惑わされないということ。悪かった点は、当時の教育で差別問題に固執しすぎて分、視野が狭かったかなと思う事ですかね。」(板野中学校全体学習8～10年目・人権を語り合う中学生交流集会 30代男性 AS)
- 「全体学習のきっかけというものは、同和問題についての理解を深め、差別解消に向けて取り組んでいく、というのが主な出発点だったと記憶していますが、話し合いはそれにとどまらず、クラスメイトの個別の問題や、進路の問題など具体的などころにまで及び、時には自分も熱く思いを語っていたなあとと思います。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代女性 NN)

部落問題をはじめ、個人人権課題それぞれが学習されても、それらが関連的に捉えられず、まるで別の教科であるかのように別個の問題として生徒の中に入っているという実態を目にすることがある。まして、今、社会や世界で起こっている様々な問題が人権学習や資料とつながっていない現実について聞かれることもある。それは人権学習本来の姿とはいえないのではないだろうか。本来、個人人権課題それぞれは、多くの部分でつながりがあり、なおかつ現代社会で起きている問題とも深いつながりをもつ。そしてそれは、今、目の前にいる子どもたちが生きている生活と直接つながっていることも多くある。常にそういう視点で人権学習の教材や、社会で起こっている問題を見聞きしておく必要がある。

る。教師にそういった視点があり、朝夕の学活や道徳・学活の時間、また折にふれ話題提供していくことで、自然と子どもたちに、社会への関心が芽ばえ、意識してニュースや新聞を見るようになる。ときには授業などの場面において、クラスに紹介し、問いかけることもある。教師としてその一つひとつに答えられればよいが、なかなかそういうわけにもいかない。そのときは、素直に「わからない」と答え、クラスみんなで答えを見つける道を探ればよい。子どもたちのなかにある「なぜ？」を育てる機会を大切にすることで、日ごろの人権学習がより身近に感じられるとともに、知的好奇心を刺激し、知への探求心を高め、知ることの面白さ、分かることの楽しさを感じられれば、学習への意欲は自然と高まることになる。